インタビューコーナー

専門研修は、全国28大学と連携する琉大病院で幅広く、高度な、かつ臨床研究を含めて研修してもらいたい。

琉球大学医学部附属病院長
須加原　一博　先生

Q1. この度は、琉球大学医学部附属病院長就任おめでとうございます。現在の率直なご感想をお聞かせください。

丁度、国立大学法人化および新臨床研修制度が導入された平成16年4月から、瀧下前病院長のもとで、4年間副院長をさせて頂き、大学病院経営の厳しさを身に沁みて感じておりましたので、率直に言って、たいへん難しい時期に重責を負うことになったと思いました。慌てても仕方ないので、少し開き直ったような心境で覚悟を決めました。県医師会の先生方には、これまで以上にご協力、ご支援を得て、大学病院としての役割を果たせるように努力したいと考えておりますので、よろしくお願いします。

Q2. 今年度から沖縄県医師会の理事にも就任され、公務も大変だろうと存じますが、今後の抱負をお聞かせください。

沖縄県医師会の仕事は、これまで広報委員などを経験させて頂きましたが、その時から会員の皆さんがたいへん熱心かつ真剣にいろいろ議論されるのを目にし、感心させられると同時に、勉強にもなりました。理事会は、毎週開かれ2時間以上議論されます。会長はじめ理事、役員、事務方のactivityの高さに驚いております。私は、大学病院以外の経験は全くないため、参加していろいろ勉強させて頂いております。忙しくてもできるだけ参加し、県医師会に

P R O F I L E

1975年3月	熊本大学医学部卒業、麻酔科入局(研修医)
1977年4月	熊本大学大学院医学研究科入学
1981年3月	熊本大学大学院医学研究科修了（医学博士取得）
1981年9月～1984年7月	米国コロラド大学 National Jewish Hospital and Research Center 呼吸器内科部門 客員研究員（Dr. RJ Mason）
1984年11月	熊本大学医学部講師（麻酔学講座）
1991年8月～1992年7月	米国コロラド大学 National Jewish Center for Immunology and Respiratory Medicine 呼吸器内科部門に文部省在外研究員として派遣
1995年6月	熊本大学医学部助教授（麻酔学講座）
2000年4月	琉球大学医学部教授（麻酔科学講座） 琉球大学医学部附属病院集中治療部部長併任
2003年4月	琉球大学医学部教授（生体制御医科学講座麻酔科学分野に改組） 琉球大学医学部附属病院集中治療部部長併任
2004年4月	琉球大学医学部附属病院副病院長
2008年4月	琉球大学医学部附属病院長

現在に至る。

【免許・認定ほか】
・麻酔科標榜医　・麻酔指導医認定　・臨床修練指導医　・日本呼吸器学会専門医、指導医　・日本ペインクリニック学会認定医　・日本蘇生学会蘇生法指導医認定　・日本集中治療学会専門医

何らかの積極的な貢献ができればと思っております。

Q3. 琉球大学附属病院は開院から20年を越えました。大学附属病院としてさらなる飛躍が期待されていますが、貴院の将来像についてご意見をお聞かせ下さい。

昭和47年に保健学部附属病院、昭和56年に医学部附属病院に改組され、昭和59年に現在の上原へ移転しております。私が熊本大学から赴任してきたのは、2000年4月の沖縄サミットの時です。当初、教授会等で熊本と違い大学病院と関連病院との関係の薄さに少し驚きを感じました。現在、沖縄県内には県立南部医療センターなどすばらしい病院がたくさんあります。しかし、大学病院との連携はまだ良いとは言えません。これまで大学病院としても役割・使命を充分果たしていないためだろうと認識しております。これからは、県内唯一の特定機能病院として、県民の信頼を得られるように努力していきたいと考えております。幸い7月末に文部科学省の「大学病院連携型高度医療人養成推進事業」のプロジェクトも採択されました。このプロジェクトは、琉大病院が初期臨床研修、専門研修、大学院教育の行える県内唯一の医療人総合育成機関として、全国の大学および医療機関と多極的に連携するとともに、琉球大学の医療人GPと連携して臨床研究を行える、幅広い質の高い専門医師の育成を目指したものです。5年のプロジェクトで基盤ができれば、将来的には、南に開かれた東アジアの医療拠点病院としても活躍できると確信しております。大学病院の再開発の時期も近づいています。このプロジェクトを契機にして、再開発とともに大きく飛躍することを期待しております。

Q4. 琉球大学附属病院は県内唯一の大学附属病院として県民から寄せられる期待が大きいと思います。県立病院を含めた他病院、診療所との連携、離島医療に関してご意見をお聞かせ下さい。

先ほどから大学としての使命・役割と言っておりますが、要するに、「県民から信頼される、県民のための大学病院」が、病院長としてのモットーです。2000年に沖縄に赴任し、麻酔科学教室の基本方針として、「離島医療支援」を第一に掲げ、宮古島、八重山はもちろん、県内殆どの病院支援を行ってきました。沖縄県には、大学病院を中心としたRyuMICグループ、県立病院グループや群星グループのすばらしい初期臨床研修プログラムの御陰で、初期臨床研修医の数は全国1位で、毎年150名近く集まっております。しかし、専門研修になると、沖縄に長く留まる医師が少なく、離島・僻地医療などの問題が解決できておりません。先ほど述べた「大学病院連携型高度医療人養成推進事業」のプロジェクトにより、初期臨床研修は、地域の医療機関でプライマリケアを中心に研修し、専門研修は、全国28大学と連携する琉大病院で幅広く高度な、かつ臨床研究を含めて研修してもらい、質の高い医療人として、離島を含めた地域医療機関へ循環するシステムを確立することが重要と考えております。それにより、琉大病院で専門研修を受けてくれる医師が増えることを期待しております。このプログラムは、ハワイ大学をはじめとする海外の大学との連携も視野に入れております。離島・僻地医療に従事した医師には、海外研修の機会を与えるようなインセンティブも考えられると思います。

Q5. 新臨床研修制度が発足して以来、全国の地方大学で医師不足が深刻化しています。医師不足対策として厚労省は、医師養成数増員の方針を示していますが、琉球大学として医師養成並びに医師確保について、どのようにお考えでしょうか。

医師確保については、先ほどの質問に対する答えと重複しますが、医師養成数増員は、女性医師の増加も視野に入れて考えれば、当然と思います。しかし、現在の医師不足問題は、医師数だけで解決出来る問題ではないと考えております。勤務医に対する手当が、いろいろな職種の数を含め充分行われていないところに問題があって、国が、これまで最も重要な「教育と医療」に充分力を入れてこなかったためと考えております。医師数だけではなく、充分な勤務医

支援体制を確立しない限り解決できないと考えます。

Q6. 最後に日頃の健康法やご趣味等についてお聞かせください。

熊本の学生時代は、ラグビー（バックスのセンター）で、卒業後は医局対抗の野球（不動の4番バッター）でハッスルしておりましたが、沖縄に来て、あまりスポーツをする機会がありません。できるだけ週に1回は、土曜あるいは日曜に、近くでジョギングをするようにしておりますが、出張などでなかなかできません。教室は6階にあり大学ではできるだけ階段を使うように心がけております。学生にもエレベーター禁止と言っております。沖縄の青々とした空と海を見ながら、ドライブしたり、食事したりしてリフレッシュしております。

インタビューアー：広報委員　鈴木 幹男

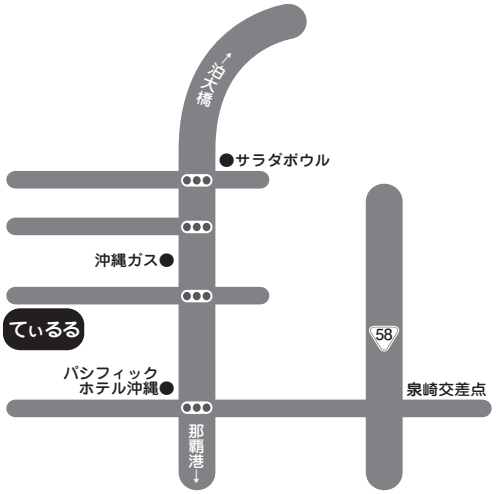
お知らせ

「骨と関節の日」

テーマ：骨粗鬆症と運動器不安定症

日本整形外科学会では、運動器に関する理解を深めてもらうために平成6年2月に10月8日を「骨と関節の日」と定めました。さらにWHOが「運動器の10年」世界運動を平成12年（2000年）から提唱したことを受け、「運動器の10年・骨と関節の日」として、運動器を健康に保つことの重要性を啓蒙しています。

さて、今年のテーマは日本整形外科学会により「骨粗鬆症と運動器不安定症」と決定されました。沖縄県整形外科医会では、「骨粗鬆症と運動器不安定症」について諸先生に専門的な立場から10月8日にあわせて新聞紙上の座談会で討論していただき、10月5日（日）には市民公開講座を下記の日程で予定しております。また、講演後、医療相談や骨密度測定など無料で行うことも企画しております。医療関係者各位の皆様には、「運動器の10年・骨と関節の日」の啓蒙活動に対してご協力をお願い申し上げます。

記

市民公開講座
テーマ：骨粗鬆症と運動器不安定症
日　時：平成20年10月5日（日）
14：00～16：00
場　所：沖縄県男女共同参画センター
「てぃるる」